

コミュニティ

community

The New Apostolic Church around the world



2022(令和4)年第9号



(nac.today(1))

我々が共有するもの……………2

昔も今も共に……………2

(アジア訪問)

必要なものをすべて手に入れる方法…3

(教義)

安楽死と緩和治療の狭間で……………4

(nac.today(2))

二度目のバプテスマ……………7

(聖書物語)

神の言われることに耳を貸さないカイン……8



日本新使徒教会

我々が共有するもの

エンリケ・エドゥアルド・ミニオ教区使徒（南米）は、異なる文化や言語を持つ人々が共通に持っているものとは何かと問い、その答えを見つけています。



今年の初め、私たちは主使徒から「キリストにあって共に」という年間の標語をいただきました。その際、「共に」には四段階あることを教えていただきました。四段階とは、三位一体なる神様との交わり、礼拝の中での交わり、交わりない共同体の中で生きること、この世にいる人と陰府にいる人による交わりであります。つまりこの標語による行動は「交わり・共同体」という言葉に集約されるのです。

オンライン版オックスフォード英語辞典によると、英語の「fellowship」の定義の一つとして、「何かに参加している、ないしある特定の人物と何かを共有している事実または状態」となっています。

皆さんと私は暮らしている国も、話している言語も、文化も違うでしょう。では、私たちは何を共通に持っているのでしょうか。何を共有しているのでしょうか。

神の子たちにとっては、「希望に導く約束をくださった神様がいらっしゃること」というのがその答えになります。これは国籍、言語、文化を超越するものです。ここで言っている約束とは、「キリストが私たちのために来てくださる」というもので、キリストがおいでになった時に御許に引き上げていただけるよう、ふさわしい者となれることを、私たち皆が願っています。

聖書に書かれている教えを見直してみましょう。使徒言行録1章4節にはこう書いてあります。「そして、食事を共にしているとき、彼らにこう命じられた。『エルサレムを離れず、私から聞いた、父の約束されたものを待ちなさい。』」これに初期の弟子たちはどう対応したでしょうか。聖書には「五旬祭〔ペンテコステ〕の日が来て、皆が同じ場所に集まっていた」と書いてあります（使徒2：1）。

初期の弟子たちがイエス様の約束を信じて、高い所からの力（ルカ24：49）を一つになって待っていたことは、明らかです。彼らは「共に」待っていたのです。

初期の弟子たちと同様に、私たちも素晴らしい約束をいただいております。「行ってあなたがたのために場所を用意したら、戻って来て、あなたがたを私のもとに迎える。こうして、私のいる所に、あなたがたもいることになる」（ヨハ14：3）。主使徒によって一本の道が示されています。つまり「正しい環境の中で、共にキリストにとどまること」です。先人たちと同じように、私たちもキリストを信じましょう。

神様は、私たちに期待しておられる一致を成し遂げるために、私たちが体得しなければいけないことをしっかり考えるよう一強制ではなく一勧めしておられます。それは、愛し合い、助け合い、祈り合うことです。

冒頭の「共通に持っているものとは何か」という問いに対する答えは、賛美歌にもあります。「規範とすべきこそ 神の愛なれ」（366番）。キリストにあって共にする努力と歩みが続けていきましょう！到達したいと強く願っている非常に高価な宝を、私たちは皆、共通に持っているのです！

（2022年3月7日 nac.today より）

昔も今も共に

「富める者は貧しい者に進んで与える」—アテナイ〔アテネ〕の哲学者アリストテレスは、初期のキリスト教徒になんと美しい証しをしたことでしょうか。ミヒヤエル・デプナー教区使徒（コンゴ西部）による、この言葉に対する所感を紹介します。

イエス様は、十字架につけられる直前、弟子たちのためだけでなく、ご自分の言葉によって自分を信じる人々のためにも、時間をかけて祈られました。「私が彼らの内におり、あなたが私

の内におられるのは、彼らが完全に一つになるためです。こうして、あなたが私をお遣わしになったこと、また、私を愛されたように、彼らをも愛されたことを、世が知るようになります」（ヨ

ハ 17:20-23)。

イエス様は、ご自分の死が迫っている恐怖を感じながらも、教会の一致を重視されました。私たちが互いに愛し合い、持っているものを分かち合おうとすることによって、キリストが父から遣わされたことを証しすることになります。教会とキリストにおいて私たちが一致することは、神様がキリスト同様、ご自分の民を愛してくださることを証します。

最近、初期のキリスト教徒に関する文献を読みました。紀元1世紀、ギリシャの哲学者であるアテネのアリストテレスが、ローマ皇帝ハドリアヌスに書き送った文書です。

「…彼らは隣人を愛し、公正に判断する。彼らはやもめ〔寡婦〕を軽んじることもなく、孤児を傷つけることもない。豊かな者は貧しい者に進んで与える。見知らぬ人を見かけたら、家に連れて来て、本当の兄弟のように一緒に楽しく過ごす。彼らに対して、肉においてではなく、霊による神による兄弟と呼ぶのである。彼らは、キリストのために自分の命を捨てることを望んでいる。彼らはその戒めを厳格に守り、主なる神が命じられたとおりに聖く正しく生き、食べ物や飲み物、その他の品物が与えられることに、絶えず神に感謝を献げている…。」

この言葉に私は深く感動し、「自分は、キリストの教会でこのような人生を歩んでいるだろうか」と自問せざるを得ません。「昔はもっと楽な時代だった」という見方もあるでしょう。慌ただし



い現代社会では、自分のことにしか手が回らないからです。しかし、初代教会の兄弟姉妹にとっても、そう簡単なことではなかったと思います。

キリストは、生涯最悪の瞬間にも、私たちのことを気にかけてくださいました。私たち相互の一致のために、そして、キリストと私たちとの一致、父と私たちとの一致のために祈ってくださいましたのです。

私たちは、このキリストとの一致、そして教会の中での互いの一致を堅持しようではありませんか。私たちの未来にとって、教会まさに「温室」です。教会で、最初は席を共にしなかった人たちが、どちらかということ好きになれなかった人たちに、向き合うことを学びます。同じ食卓を囲みます。同じ赦しを求めて共に祈り、共に天の父を讃え、感謝するのです。

(2022年3月22日 nac.today より)

必要なものをすべて手に入れる方法

疲れませんか？交わりにも、約束にも、信仰にも疲れませんか？その解決法は、著者も受取人の身元も不明な手紙の中に見つけることができます。これは、主使徒による神の礼拝からの目覚めの言葉です。

2022年3月にスリランカを牧会訪問したシュナイダー主使徒は、3名の教区使徒と22名の使徒を同行させました。礼拝は首都コロンボで執り行われました。説教のための基調聖句は、ヘブライ人への手紙4章14～15節が引用されました。「さて、私たちに、もろもろの天を通して来られた偉大な大祭司、神の子イエスがおられるのですから、信仰の告白をしっかりと保つてはいませんか。この大祭司は、私たちの弱さに同情できない方ではなく、罪は犯されなかったが、あらゆる点で同じように試練に遭われたのです。」

ヘブライ人への手紙は、誰が書いたのか、どの教会に宛てたものなのかが不明です。「聖書には書かれていません」と、ジャン＝ルーク・シュナイダー主使徒は語りました。しかし、はっきりしているのは、著者がグダヤ人の強い影響を受けて信仰を弱めているキリスト者たちの信仰を強めようとしたことです。彼

らの問題は、「信仰に疲れてしまった」ということです。

なぜでしょうか。一つ目の理由は、キリストの再臨を待つことのむなしさを感じていたこと、二つ目は、生活環境が変わり、迫害を受けるほど悪い状況になったこと、そして三つめは、教師や教会指導者と折り合いが悪くなり、教会を去っていったことでした。

今回の聖句は、これらの理由に対して、適切な答えと解決法を提供しています。重要なのは、「ヘブライ人への手紙のメッセージは、今でも私たちに有効である」という主使徒の指摘です。

「主がまだおいでにならない」と失望しているすべての人には、こう申し上げることができます。「私たちの目に見えなくても、神様が『ある』と仰せになるものは、存在するのです。イエス・キリストは、神様の御国に人としてお入りになった最初のお方

写真：スリランカ新使徒教会



です。イエスはすでに御国にいらっしゃるのです。」ですから、どうか自信を持ち続け、忍耐強くあり続けましょう。皆さんが告白したことをしっかり守ってください。イエス様はおいでになるのです。私たちを御国に導いてくださるのです。

日常生活の中で信仰の効果を見過ごしているすべての人に、主使徒は以下のように明言しました。

- 御子は地上においでになり、人類の運命を共にされました。御子は皆さんと共にいてくださいます。皆さんの味方です。
- イエス様は、苦しむということがどういうことかをご存知です。私たちが何を必要としているかを知っておられ、私たちに必要なものを与えてくださいます。そして「神はあなたを愛している」ということを私たちに教えてください。私たちの

ために、私たちと共に祈り、天から糧を与えてくださいます。

- また、イエス様は私たちが悪から逃れる方法を示してくださいました。最後まで従順であれば、死と悪に打ち勝つことができるのです。それは、どこかの先生から教わるようなことではありません。イエス様がこれを証明されたのです。うまくいきます。
- イエス様は完全な犠牲となられた、つまり一度も罪を犯されなかったので、皆さんの罪を赦すことができます。皆さんは罪の赦しに与り、永遠の命に備えることができます。

数の力

信徒の親睦から遠ざかっているすべての皆さんは、次のことを思い出してください。

- 神様の言葉を聞いて、それを心に刻む必要があります。
- 罪の赦しに与る必要があります。
- イエス・キリストの体と血という聖なる糧をいただく必要があります。
- 一人では救いを得られないことを自覚してください。お互いが必要なのです。
- 教師や教役者に問題があるなら、ヘブライ人への手紙に書かれていることをお勧めします。「その教役者のために祈ってください。神様は職務を通して私たちに祝福しようとお考えなのです。」

結論として、主使徒はこう述べました。「イエス様はおいでになりますし、花嫁の準備は行われます。それに参加するかどうかは、すべて私たち次第です。」

まとめ

私たちはキリストを信じて、その再臨を希望します。イエス・キリストは私たちと共に苦しみ、私たちが必要なものを理解され、それを礼拝の中でくださいます。私たちは兄弟のような親しい交わりを持続しましょう。

安楽死と緩和治療の狭間で

死はしばしば恐怖を伴います。苦痛、孤独、個性の喪失、依存などです。その結果、自分の人生の終わり方を自分で決めたいという欲求が生じますが、キリスト教はそのバランスをとるための指針を与えてくれます。

安楽死とセットで語られることが多い自殺補助。自殺補助とは、積極的安楽死と対照的に、他人が自殺することを意図的に援助したり、促したりする行為です。

積極的安楽死と自殺補助に関する法律は、国柄もあり、大きく異なります。合法化の議論も公の場で行われています。それぞれの国の法律は、インターネット上で見ることができます。

末期患者への支援

死が間近に迫っていると予想される場合、可能な限りの医療介入を行うかどうかを判断する必要があります。患者、医師、親族は、(末期の)病気をどの程度まで自然の経過に任せるかを決めることとなります。患者が意思決定できなくなっている場合は、できるだけ最新のリビングウィル〔終末期医療におけ

る事前指示書]に従って治療を決定できます。リビングウィルがない場合は、医師が親族と合意の上、法律に従って判断することも可能です。

治療は、完治や延命が目的ではありません。痛みや息切れなどの症状を和らげること、そして患者さんを支えることが優先されます。患者さんの生命を絶つことが目的ではなく、病気が自然に進行し、患者さんが臨終を迎えることです。これには、生命維持手段（蘇生、人工呼吸、人工栄養、人工透析など）の拒否、延命薬の減量、特定の介入の中止などが含まれます。可能な限りの治療を選択することは適切ではありません。栄養補給と水分補給は、末期患者を不快にさせることなく、それが助けになる限り続けなければなりません。

このような場合、痛み、呼吸困難、恐怖などの苦痛な症状をなくす、または軽減することが重要です。終末期には、看護ケアと人間的な優しさが同様に重要です。ホスピスやホスピスケアは、このような状況において非常に価値のあるものです。親族や宗教家による支援は、あらゆる文化や宗教で重視されています。

医療、看護、牧会が行われ、人間的な優しさがあっても、激しい痛みや強い恐怖や不安を感じることは稀です。症状を抑えるために、患者や親族と相談して、鎮痛剤と鎮静剤を大量に投与することが適切な場合があります。呼吸の抑制や、まれに生命の短縮が副作用として現れることがあります。

倫理的配慮

人間の尊厳を死後も維持することは、誰もが求めます。積極的安楽死に賛成する人々は、おそらくこれが自己決定的な死の権利によってのみ達成されると考えることで、積極的安楽死の正当性を主張すると思われませんが、積極的安楽死に反対する人々の主な主張は、人間の生命の神聖さあるいは不可侵性にあります。何人も人間の生命を積極的に抹殺する権利を有しない、と考えます。

リビングウィルなどによる本人の意思表示の遵守・非遵守は、人間の尊厳を尊重するか脅かすかの一例とされています。自己決定が人間の尊厳と同義であるとする出版物もあります。

苦痛の防止は、積極的安楽死や自殺幫助の支持者が用いる中心的な議論であり、この考え方に異議を唱えることは困難なように思われます。

苦しみを和らげることは、医学や現代倫理における主な目的です。苦しりはしばしば痛みと同一視されます。しかし、苦しみはもっと簡単に否定的な経験と結び付けられます。耐え難い苦しみは、人の態度に大きく左右します。

耐えられないと認識されている苦しみを、人生経験や美德といったより高い価値を身につけるための機会として捉えることは、苦しむ人にとって有益なこともかもしれません。そうすることで、新たな視点が生まれます。このようにして、たとえ深刻な



障がい・重度の障がいがあっても、人生に意味と重要性を持つことができます。そうすれば、死を人生最後の大きな試練としてとらえ、受け入れることができるようになります。

積極的安楽死を反対する人々が表明する懸念の一つは、積極的安楽死を合法化するために満たさなければならない条件（たとえば、最終段階の難病に限定）と、それが許される対象集団（たとえば成人のみ）が、拡大されるのが必至ではないかということです。例えば、積極的安楽死を特定の条件下で合法化した国は、当初は成人のみを対象としていましたが、後に子どもにも拡大しています。

医師は、従来の考え方に従って、患者さんの闘病を手助けします。患者さんは、治そうとしてくれるその医師を信頼します。もし医師が積極的に殺すこと（積極的安楽死）を認めれば、この信頼に基づく重要な関係を大きく損なう恐れがあります。医療審議会や医師会は、この信頼関係の喪失の危険性を強調しています。しかし、積極的安楽死や自殺幫助の擁護者は、医師からの臨終に向けた支援を、耐え難い死からの解放と受け止めています。

尊厳死

安楽死、すなわち死への幫助をめぐる議論は、おもに、倫理的正当性や合法化の是非についての問題を巡って、一つの見解に支配されているのが普通です。キリスト教の立場からすれば、それよりもはるかに重要な点、すなわち、苦痛の軽減や支援という形での死へのケアや支援がいかに可能であるかということは、しばしば後回しにされているのです。

確かに、孤独で捨てられた弱者という感情を抱きながら死んでいくのは忍びないでしょう。人間の尊厳を大切するためには、人生のこの段階において、思慮深く、注意深く、繊細なケアと支援が特に必要とされます。高度に熟練した緩和ケアと牧会は有益です。

キリスト教からの視点

キリスト教の視点によれば、生命は神様から与えられたものです。人間は、その能力や健康状態とは無関係に、愛に満ちた神様の慈しみ（神様の御姿）により、尊厳に値する存在です。したがって、積極的安楽死や自殺幫助は第五の戒め「殺してはならない」に違反するのです。



神様からの賜物である生命を恣意的に絶つことは許されません。しかし、これは延命のために考えられるすべての可能性を駆使しなければならないというわけではありません。キリスト教的には、末期患者が治療や延命処置を拒否したり、「安らかに死にたい」という理由でこれらの治療や処置を打ち切ったりすることは罪ではありません。

隣人を愛しなさいという戒めに従い、家族、会衆、教役者は、重篤患者や末期患者が抱える孤独や弱さへの恐れや、死に至る過程に対処できないことへの恐れを少なくするために、配慮することが強く求められています。自宅、ホスピス、緩和ケア病棟などの快適な環境で、親族や医療従事者から愛と思いやりのある支援を受ける経験は、重篤患者や末期患者にとって極めて重要です。

また認識すべき重要な点として、終末期の痛みや不快感は、緩和医療を受けることで軽減されることが多いです。しかし、最適な状況であっても、すべてが楽になれるわけではないことを忘れてはなりません。死を迎えること、死、別れは、末期患者やその近親者にとって、やはりつらいものです。

しかし、私たちキリスト者は、神様への信頼と、神様が助けをくださるといふ希望を土台に、困難な状況においても慰めと力を体験できます。永遠の命と神様との未来があるという悟りによって、別れの恐怖を減らすことができるのです。

新使徒教会の立場

すべての人間には、尊厳をもって死ぬ権利があります。安楽死と緩和ケアは、死期が迫り、治療や苦痛の改善の見込みがない人に関わるものです。キリスト教の観点からは、これは末期患者の介助と支援という形が取れるだけであり、決して死を手伝うものではありません。

積極的安楽死も自殺幫助も、「殺してはならない」という第五

の戒めに違反します。延命処置の拒否による死を許容することは、キリスト教信仰の原則に反しません。症状抑制を目的とした一時的な疼痛鎮静処置は、命を縮めるリスクをわずかに伴うことがあります。こうした処置は専ら症状抑制を目的としているため、是認されます。

緩和医療は、多くの場合、終末期に生じる痛みや不快感を我慢できるようにします。栄養と水分の補給は、末期患者を不快にさせることなく、それが助けになる限り続けるべきです。

末期患者には、キリスト教的な人生観に則して、快適な環境の中で、親族や専門家による愛と思いやりのある優しい支援を提供するよう配慮すべきです。

福音に照らした教会と、人生の中で多くのことが変化するこの段階にあって一貫した信頼できる支援は、末期患者とその近親者にとって重要です。教会と支援は、不安を和らげ、霊的な力を結集させることができます。

終末期における医療行為に関する決定は、末期患者自身が行うべきものです。この点については、医師や親族の助言を仰ぐことができます。それが不可能な場合は、親族と医師が一緒になって決定すべきですが、本人の希望が特に重要です。そのため、多くの場合、末期患者の意思を表したリビング・ウィルが作成されていると便利です。

指示や法令は、キリスト教の価値観に反しない限り、遵守しなければいけません。

まとめ

すべての人間には、尊厳ある死を迎える権利があります。

安楽死と緩和ケアは、治療や改善の見込みがない、末期患者に関わるものです。キリスト教の観点から、この処置がとれるのは末期患者を介助・支援するという形だけであり、決して誰かが死ぬのを手伝うということではありません。

積極的安楽死も自殺幫助も、一切認めません。

延命処置や症状緩和のための一時的な疼痛鎮静を拒否して死を迎えることは、命を縮めるリスクが少ないので、キリスト教の原則に反するものではありません。

特に、キリスト教的な人生観の中で、緩和医療は非常に重要な意味を持っています。

末期患者の近親者による助けや支え、福音に照らした教会は、不安を和らげ、霊的な力を結集させることができます。

リビングウィルは、末期患者の意思を尊重したケアをするために役立ちます。

sacrament (44):

二度目のバプテスマ

信徒はどのようにして聖霊を受けるのでしょうか。これについても聖書の記述は曖昧で、この問いに対する答えにはほとんどなっていません。答えは初代教会が明らかにしています。そしてこんにちに至るまで、この答えが土台となっているのです。

しるし——もっと多くのしるしが必要です。確かに洗礼があります。古いアダムを溺れ死なせること、生まれ変わるための沐浴、イエス様の死に浸ること、罪を洗い流すことです。しかし聖書には、刻印や油注ぎという文脈の中で、聖霊についても語られているのです。そして、キリスト（＝メシア＝「油注がれた者」）の弟子たちは、油を注がれていないとしたら、どうなるのでしょうか。

これと似たようなことが、紀元後数世紀の間に議論され、その議論が進み、後々まで影響を及ぼすことになります。

接手から油注ぎへ

「聖霊を受けなさい。」これは、ヨハネによる福音書の証言です。この証言を、多くの書簡を著したパウロが説明しています。そしてこのことは、使徒言行録の中で、接手という行為が示されています。従って、この行為は、新約の時代には --- 沐浴に加えて --- すでにバプテスマの一部となっていました。

しかし間もなく、そこに油注ぎという行為が加わるようになりました。油注ぎの根拠は聖書に書かれています。例えば、イエス様はメシアに関するイザヤの言葉をご自身に当てはめておられます。「主の霊が私に臨んだ。／ [...] 主が私に油を注がれたからである」（ルカ 4：18）。そしてペトロはコルネリウスの家で「神はこの方 [=ナザレのイエス] に聖霊と力を注がれたことについて教えてください（使徒 10：38*）。

単なる装飾ではない

遅くとも紀元 3 世紀には、水のバプテスマ --- 洗礼 --- を受けた後、司教から接手を受け、塗油を受けるようになります。それは断食、祈り、沐浴、塗油を含む数日間の準備から、数年間にわたる指導までの、非常に広範な過程の集大成でした。

そして、非常に早い時期から、聖霊を授けるこの行為は、単なる洗礼の装飾のような延長ではなく、神学的に必要なものであると考えられていました。したがって、この堅信 * がなければ、洗礼は不完全であると考えられます。教父キプリアヌス * は 3 世紀中頃に、この二重の sacrament に言及しています。



使徒職とのつながり

しかし、違いが現れます。西方ラテン教会では、司教の接手が中心なのに対し、東方ギリシャ正教会では、塗油のほうが高い地位を占めています。そしてこれは、この行為をどの教職が行うかを決定する上で、決定的な役割を果たすことになります。いづれにしても、問題なのは、生まれたばかりの新しい sacrament が、使徒職とどのように結びついているか、ということです。

西方教会でも東方教会でも、聖職者の権限はおもに「使徒継承」によるものです。つまり、聖書に登場する使徒たちの時代から、司教 [主教] による司教の叙任が途切れることなく続いているのです。接手は司教が務めるため、カトリック教会で堅信を行うことができるのは、通常司教のみです。一方、正教会の塗油は、司祭が行うこともできます。そのために主教が油を聖別していれば十分です。

入信までの三段階

正教会は初代教会と同様、三つの式次第で信徒を迎えます。洗礼機密の直後に傅膏機密（油注ぎ）が行われます。続いて聖体機密があります。つまり主の晩餐を --- 大人も子供も --- 受けます。

塗油は、数十種類の芳香成分を含んだ聖油を用いて行われます。十字を切りながら、額、目、鼻、口、耳、胸、手、足にこの油を塗り擦ります。その都度、司祭は「聖神の恩賜の徴」と唱えます。

洗礼は信徒がキリストの死と復活に与らせていただくもので

*訳者注（出典はすべてウィキペディアより）

新共同訳…「神は、聖霊と力によってこの方を油注がれた者となさいました。」

堅信…信者が洗礼を受けた後、一定の儀礼において聖霊の力、ないし聖霊の恵みを受けるとされる概念。

キプリアヌス…カルタゴの司教（主教・監督）。初期キリスト教の重要な著述家。ラテン教父。

ある一方で、正教会の考え方によれば、傅膏はペンテコステにおける聖霊の降臨に一人ひとりが与らせていただくものです。油注ぎによって、洗礼を受けた人は平信徒となり、ラオス [λαός] すなわち神の民の一員となります。

聖霊を授けるための按手、その行為と使徒職との関連、そして証印という象徴 --- これらは新使徒教会が「聖なる証印」として初期キリスト教から受け継いだものです。

(2022年1月10日 nac.today より)

創世記4章1～6節

神の言われることに耳を貸さないカイン

アダムとエバには二人の息子がいました。兄の名はカインと言いました。弟の名はアベルと言いました。カインは農夫で、アベルは羊飼いでした。

ある日カインは、土地の実りを一部、神様にお供えました。アベルも神様にお供えをしました。動物の群れの中から初子^{ういご}をお供えました。

神様はアベルとその供え物を目を留められました。カインとその供え物には目を留められませんでした。カインはとても腹を立て、不機嫌そうでした。神様はカインにこう尋ねられました。「なぜ腹を立てるのか。なぜ不機嫌そうにするのか。もしあなたが正しいことをしているなら、私はあなたの供え物を受け入れよう。しかし気をつけなさい。もし正しいことをしていないなら、罪があなたの心の扉で待ち伏せている。あなたはその罪に屈してはならない。」カインはアベルに「野に出かけよう」と声をかけました。二人が野に出ると、カインはアベルを手にかけて殺してしまいました。

神様はカインに「弟アベルはどこにいるのか」と尋ねられました。カインは神様に「知りません。私は弟の番人でしょうか」と答えました。

すると神様はカインにこう言われました。「何ということをしたのか。あなたの弟の血が土の中から私に向かって叫んでいる。今やあなたは呪われている。あなたが土を耕しても、その土地にはもはや実を結ぶ力がない。あなたはもう家を持てなくなる。」するとカインは神様にこう言いました。「私の罰は大きく、

背負いきれません。このように、あなたは私を大地で働けないようになさいました。そこで私はあなたから身を隠します。私は地上をさすらい者となります。そして私を見た人は、必ず私を殺すでしょう。」

しかし、神様はカインに優しくされたのです。誰からも危害を加えられることがないように、カインにしるしを付けられました。そしてこう言われました。「カインを殺す人は誰であれ、七倍の復讐を受けるだろう。」こうしてカインは神様のものを去って行ったのです。



ドイツ中部・メルゼブルクにある新使徒教会は、ロシア・ウクライナ戦争によるウクライナ人避難民にとって、安心できる場所になりました。

コミュニティ

2022(令和4)年第9号・日本新使徒教会発行

日本小教区主任牧師：門平 彰弘 (E-mail: kadohira.nac@icloud.com)

多摩教会 〒206-0014 東京都多摩市乞田1320 Tel. 042-374-0070 (日本小教区本部)

松山教会 〒799-2468 愛媛県松山市小川甲110番地17 Tel. & Fax. 089-994-3556

新使徒教会国際本部：https://www.nac.org/

新使徒教会西太平洋教区：https://www.nacwesternpacific.org/

新使徒教会日本小教区：http://www.nac-japan.org/

監修：高島 健郎 / 編集担当：松岡 利恭

表紙写真：ケニア新使徒教会